

Sengokuyama Journal
of Buddhist Studies
Vol. X, 2018

仙石山仏教学論集 第10号 (平成30年)

円珍『法華論四種声聞日記』をめぐって

浅
野

学

円珍『法華論四種声聞日記』をめぐって

浅野 学

一、問題の所在

円珍（八一四―八九二）『法華論四種声聞日記』（以下『四種声聞記』）一卷は、世親（一説では、四〇〇―四八〇）『法華論』において説かれる四種声聞、すなわち決定声聞、増上慢声聞、退菩提心声聞、応化声聞について、それらの声聞の本地が何であるのかを、問答形式によって論じている書である。

本稿では『四種声聞記』について、国訳したテキスト等に基づいて本書の論述内容を検討し、先行研究を踏まえて、「対照してさらに考察すべき」である『四種声聞記』と『阿若集』との関連について考察を試みる。

二、『法華論』の四種声聞について

『法華論』は、インド撰述の法華経注釈書として唯一現存するものであり、古くから法華経研究において重要視されてきた経論である。現存する『法華論』は、勒那摩提訳『妙法蓮華経論憂波提舍』一卷と、菩提留支訳『妙法蓮華経憂波提舍』二巻との漢訳二本のみで、梵本および藏訳は散逸している。

『法華論』は、内容上から「七成就」「五示現」「七喻」「三平等」「十無上」の五章に分けて解釈されている。法華經の各品に対して、「七成就」では序品第一を、「五示現」では方便品第二を、「七喻」「三平等」「十無上」ではその他の諸品について注釈している。『四種声聞記』において取り上げる四種声聞は、『法華論』の「三平等」で説かれている。該当箇所では、四種声聞の授記に関して説かれているが、その一節は『法華論』の中でも有名な箇所として知られている。『法華論』の該当箇所には、

声聞の人の授記を得ると言うは、声聞に四種あり。一には決定せる声聞。二には増上慢の声聞。三には菩提心より退する声聞。四には応化の声聞なり。二種の声聞には如来は記を授けたまう。謂く応化の者と退しおわりて還た菩提心を発す者なり。決定せる者と増上慢の者との二種の声聞の若きは根熟せざるが故に授記を与えず。菩薩が授記を与うとは、方便もて菩提心を発せしむるが故なり。^⑤

とある。ここでいう「決定せる声聞」「増上慢の声聞」「菩提心より退する声聞」「応化の声聞」が、『四種声聞記』の取り上げる四種声聞である。『法華論』では、「二種の声聞には如来は記を授けたまう」として、その二種に応化声聞と退菩提心声聞を挙げている。また「決定せる者と増上慢の者との二種の声聞の若きは根熟せざるが故に授記を与えず。菩薩が授記を与うとは、方便もて菩提心を発せしむるが故なり」として、決定声聞と増上慢声聞には、如来から授記は与えられずに、菩薩から菩提心を発させるための授記が与えられるという。

『法華論』のいわゆる四種声聞授記の内容は、成仏の問題に関わるものであったため、後にこの問題が争点となった学派間論争が起きた際に、成仏解釈の重要な論拠として用いられた。唐代に天台宗と法相宗との間で起きた成仏論争では、四種声聞授記の記述に対して双方の立場から異なる解釈がなされた。天台宗は一切皆成の立場から、四種声聞の全てが授記を受けて成仏すると主張した。一方、法相宗は五性各別の立場から、決定と増上慢の二種類の声聞については如来から授記を受けていないため、一分不成仏であると主張した。中国仏教で起きた

この論争は日本仏教にまで持ち越されて、後に天台宗の伝教大師最澄（七六七―八二二）と法相宗の徳一（生没年不詳）との間で、成仏の問題をめぐる三一権実論争が起った。

天台宗における『法華論』の依用について、藤井教公「二〇〇二」では、

天台では上述の如く灌頂が修治した智顗の著作に引用が見られ、その後の天台教団の中でも重視されていたようであるが、むしろ本論は最澄以来の日本叡山において重んじられており、最澄は自身で本論の科文を製している。また、円珍は入唐して天台山で天台章疏を学び『法華論記』十卷を著している。^⑥

と述べられている。日本天台宗の第五世座主として知られる智証大師円珍が撰した『法華論記』（以下『論記』）は、全十卷から成る大部の注釈書であるが、これは中国三論宗の吉蔵（五四九―六三三）が撰した『法華論疏』三卷と並んで、『法華論』の末注書としてよく知られている。円珍は『論記』巻第七末において四種声聞授記について注釈しており、その箇所では智顗（五三八―五九七）説、灌頂（五六―一六三）記『妙法蓮華經文句』や、湛然（七一―七八二）『法華文句記』等の文言を頻りに引用して、それら天台章疏の説に依拠しながら詳細な注釈を施している。

三、『法華論四種声聞日記』について

『四種声聞記』は円珍の名義で著されている。しかしながら本書には偽撰説があり、そのことについて『仏書解説大辞典』では、

本書は円珍が法華論声聞本地を案ずるに定相を知り難く、たまたま入唐に際し無慶和尚の弟子恵則より聞きし所を後に延暦寺山王院に於いて元暦七年三月二十八日より三十日に至る間に案記したというも古来偽視せ

円珍『法華論四種声聞日記』をめぐる（浅野）

らるる所で、凡らく尊通のいう如く円珍の真撰には非らざるべし。^⑦

と解説している。『四種声聞記』は主題の絞られた小部の論書であり、これは円珍真撰で随文解釈の『論記』とは全く趣の異なる著述である。『四種声聞記』の内容に関しては、三崎良周「一九七八」の解説があり、それについては本稿第四章で述べる。

本書の書名に関しては、「法華論四種声聞」まではそのまま理解出来るが、「日記」という名称についてはこれが何を意味しているのか考察する必要があるであろう。円珍の著述とされているものの中で、「日記」という書名が付くものは、厳密には本書しか存在しない。「厳密には」と述べたのは、俗称で「日記」との表記が含まれる『教観日記』という円珍の著述があるからである。『教観日記』は、正確な書名を『阿若集』という。『大日本仏教全書』所収の『阿若集』^⑧を見ると、題名の下に「此下新本有俗云教観日記六字」という校注があり、ここから『阿若集』の俗称が『教観日記』であることがわかる。なお、先に円珍の著述と述べたが、実はこの書もまた『四種声聞記』と同様に偽撰説のある小部の論書なのである。^⑩

『四種声聞記』と『阿若集』の論述内容を検討すると、「阿字」「大日」「大毘盧遮那」等の用語が散見され、また梵字などの使用例も見られる。このことから、両書が密教的な性格を含んだ著述であることがわかる。その上で、「日記」という名称について考えてみると、「日記」の中の「記」は論書という一般的な意味で理解出来るとして、「日」の方は、「大日」「大毘盧遮那」等の密教用語から来していると見ることは出来ないだろうか。両書とも書名についての言及は本文中に見られないので推測の域を出ないが、これらが密教的な著述であることは間違いないので、書名にもそのことが投影されている可能性は考えられよう。『阿若集』が俗に『教観日記』と称されて、書名に『四種声聞記』と同様に特異な「日記」という名称が含まれることは、両書間の関連性の深さを伺わせるのである。

四、テキストおよび先行研究について

『四種声聞記』のテキストは、活字化されたものが公表されており、次の全集類に収録されている。

- ・ 仏書刊行会編『大日本仏教全書』第二十四冊、天台法華宗義集、天台小部集釈（大正二年十月）
覆刻版（昭和五十三年五月）
- ・ 鈴木学術財団編『大日本仏教全書』第四十一巻、天台部五（昭和四十六年六月）
- ・ 仏書刊行会編『大日本仏教全書』第二十八冊、智証大師全集第四（大正七年三月）
覆刻版（昭和五十三年五月）

- ・ 園城寺事務所編『智証大師全集』下巻、（大正七年十二月）
- ・ 園城寺編『智証大師全集』（復刊）下巻、（昭和五十三年二月）

- ・ 日本大藏経編纂会編『日本大藏経』第四十三巻、宗典部、天台宗密教章疏第一（大正九年一月）^①
- ・ 鈴木学術財団編『日本大藏経』（増補改訂版）第八十巻、天台密教章疏二（昭和五十一年七月）

以上の全集類所収テキストを集約すると『天台小部集釈』『智証大師全集』『日本大藏経』の三種の活字本があ

田珍『法華論四種声聞日記』をめぐって（浅野）

ることになる。なお、『大日本仏教全書』所収の『智証大師全集』第四は、園城寺事務所『智証大師全集』下巻を底本としている。

右に示した活字本の内、最も古いものは大正二年に刊行された『大日本仏教全書』第二十四冊である。第二十四冊には、天台系の叢書である『天台小部集釈』が収録されており、『天台小部集釈』の中に『四種声聞記』が収録されている。活字本の『天台小部集釈』の底本に関しては、寛文二年—延宝八年（一六六二—一六八〇）刊の『天台小部集釈』一五冊であるとされている。¹² なお『大日本仏教全書』においては、第二十四冊に『天台小部集釈』の『四種声聞記』を収録しており、第二十八冊に『智証大師全集』の『四種声聞記』を収録しているので、『大日本仏教全書』の中でテキストが重複している。

『智証大師全集』に関しては、もともと上中下の三巻本であったものを、『大日本仏教全書』では四巻本として収録している。これは『大日本仏教全書』智証大師全集第一で『法華論記』のみを収録して、『智証大師全集』上巻のように『授決集』を収録しなかったために生じた差異である。なお、『智証大師全集』と活字本の『天台小部集釈』とは、本文から訓点まで全てにおいて一致しているので、古くからあった『天台小部集釈』を底本として『智証大師全集』が作られたと考えられる。

一方、『日本大藏經』所収のテキストに関しては、『智証大師全集』を底本とはしていない。なお、『日本大藏經』が何れの底本に依っているのかについては、これに関する情報が無いため不明である。¹³

このように、三種の活字本に関しては『大日本仏教全書』（『天台小部集釈』および『智証大師全集』を所収）の系統と、『日本大藏經』の系統との二つがあることになる。

公表されている活字本以外には江戸時代に刊行された刊本が現存する。『仏書解説大辞典』によると、『四種声聞記』の寛文年間（一六六一—一六七三）刊の刊本と、『天台小部集釈』の寛文五年（一六六五）刊、安永七年（一

七七八）刊、文政十一年（一八二八）刊の刊本について、仏教系大学等の研究機関が所蔵していることが知られる。¹⁴さて、『四種声聞記』においては、これまでに国訳テキストが公表されておらず、また、その内容等に関する先行研究もあまり多くはない状況であるが、先行研究としては次の二つが挙げられる。

①大久保良順「二九六九」の研究

大久保良順「二九六九」では、円珍の名を借りた偽撰書説のある論書について、

智証大師撰の名を冠する『円多羅義集』『生死本源集』『阿字秘釈』『理智一門集』『顕密二宗本地三身釈』（顕密一如本仏）『法華論四種声聞日記』『阿若集』等々の一連の偽撰書については、未だ成立の前後関係など不明な点が少なくないが、いずれもみな顕密一致を説き、むしろ密教者の側に立つて『法華経』の悟りは真言教の金胎両界より外に求むべきでないとする密勝円劣の立場を主張するものといつてよい。¹⁵

と述べられている。また、最澄撰として伝えられてきた『本理大綱集』の成立時期について検討する中で、『四種声聞記』の所説を取り上げて、

『本理大綱集』の「二代五時五時説文」は横堅二種の五時を説くが、それは一家の常談であるとしても、一行阿闍梨の決として「大日経円教と法華の円教と途異なりと雖も其の理一致すること有り。」の一文を加えるのは、智証大師の『法華論四種声聞日記』をふまえた所説と考えられる。『四種声聞日記』においては、四種声聞の本地を胎金両部に配して論ずる中に、法華已然に四種声聞の本地を説くやを問ひ、今の横堅二入の五時を説くのである。¹⁶

と述べられており、『四種声聞記』が『本理大綱集』よりも先に成立したことを指摘されている。また、『本理大綱集』は密勝円劣論を主張する『四種声聞記』等の所説をやわらげて、顕密一致論を説いた書であると主張され

円珍『法華論四種声聞日記』をめぐって（浅野）

ている。¹⁷⁾

②三崎良周「一九七八」の研究

三崎良周「一九七八」では、湛然、最澄、円珍という天台宗諸師の『法華論』解釈は、智顗の『法華論』解釈に基づいていることを指摘して、

天台智顗は声聞の義を「仏の声を聞かしむ」と解し、四種の声聞のすべてに授記す、としている（『法華文句』巻一上）。そして六祖荊溪や最澄もその説を承けるのであり、円珍も『法華論記』巻七末においてこの説を敷衍している。¹⁸⁾

と述べられているが、『四種声聞記』については、

円珍の後の誰人かが、さらにその（『論記』の）説を胎金両部の密教説によって裏づけようとしたのが本書なのである。¹⁹⁾

として、『四種声聞記』が偽撰書であると言い切っている。また『四種声聞記』の内容的な問題点を指摘して、本書では、四種の声聞（決定、上慢、退大、応化）をもって胎藏の四種の阿字に宛て、さらに金剛界においては、弥勒、文殊、観音、普賢の四菩薩をもつて四種声聞の本地とするというのである。しかし実はこの四菩薩は胎藏界曼荼羅の中台八葉中の四菩薩なのである。したがって、何故に金剛界というのか、理解に苦しむ。その上、胎藏は大悲門、金剛界は大智門であるとし、大智門はその上に大悲を兼ねるに對し、大悲は大智に通じないとなし、さらに、大悲は迹門、大智は本門というのである。この説からすれば、天台智顗以下の説を具現するには金剛界の修法でなければならぬことになる。そして台密では胎金不二か、あるいは胎藏をより重んずることからすれば、このような説はいかなる根拠に立っているのか、まさに不審というほかない。²⁰⁾

と述べられている。さらに、

本書には『菩薩明普賢清淨虚空会陀羅尼經』、羅什撰『法華義記』、一行撰『瑜伽一卷義記』、『天台四教抄』等の正体不明の經疏を引いているが、それ以上に問題とすべきは、やはり円珍に擬せられている『阿若集』との関連である。²¹⁾

と述べられており、『四種声聞記』においていくつかの正体不明な注釈書が用いられていることや、円珍の名義で著されている『阿若集』との関係性については考察するべき問題であると指摘されている。『四種声聞記』と『阿若集』の関連については、具体的にいくつかの点を指摘されており、

『阿若集』にも右の（正体不明の）經疏が引用されているほか、双方ともにさして長文でないのに「大智門」、「普賢延命」「汝、我が説を破すは舌を切るに似たり」「末代の後学、千金を伝うといえども、全く此れを伝うこと莫れ」等々の共通する語句が頻りに見出され、特に「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」という、円珍の時代にはほとんどあり得ない弥陀念仏が記されている。また『阿若集』の「阿若」とは「阿字」の誤りか、という説もあるが、本書ではこの語を胎藏界大日のあらわれである普賢延命菩薩の種子としているようであり、『阿若集』では四十二字門の初字としていているようである。これらの問題は、双方を対照してさらに考察すべきであろう。²²⁾

と、問題提起をされている。

五、『法華論四種声聞日記』の国訳テキスト

先述の通り、『四種声聞記』はこれまでに国訳テキストが公表されていない。研究上の必要性から、ここでは

円珍『法華論四種声聞日記』をめぐって（浅野）

『四種声聞記』の全文について国訳を試みる。初めに凡例を示し、次に全文の国訳を示す。また、後に校異等について述べる。

〔凡例〕

- 一、底本には、増補改訂版である財団法人鈴木学術財団編『日本大藏經』第八十卷所収のテキストを用いる。なお、旧字体は新字体に改め、原文の句点は『日本大藏經』に準じた。
- 一、対校本には、覆刻版である仏書刊行会編『大日本仏教全書』第二十八冊、『智証大師全集』第四所収のテキストと、大正大学所蔵の寛文二年刊の刊本を用いた。
- 一、原文には傍注および対校本との語句の相違を注記し、国訳には内容的な注記をつけた。
- 一、本文中の大部分が問答形式によって論じられていることを考慮して、見やすいように文章を適宜区切って記した。
- 一、『日本大藏經』の該当箇所が分かるように、区切り毎に適宜、始まりの頁数・上下・行数を原文の前に表記した。
- 一、原文を国訳の前に示し、国訳は原文より一字下げで表記した。
- 一、テキストの中の割注部分は、フォントを下げて表記した。
- 一、国訳の送り仮名は、現代仮名遣いにより、新字体を用いた。
- 一、経文等の引用および人の会話部分には鍵括弧「」を付け、鍵括弧の中の引用および人の会話部分には山括弧（ ）を用いた。

〔八二頁上段一行目〕

法華論四種声聞日記

入唐沙門 円珍 叙^{②③}

〔八二頁上段四行目〕

元慶^{②④}第七年三月二十八日。從未時許入唐沙門円珍留意一心謹案^{②⑤}天親所造法華論声聞本地者。定相所難定知。
元慶^{②⑦}第七年三月二十八日、未の時許より入唐沙門円珍は一心に留意して、謹んで天親造る所の『法華論』の声聞の本地を案ずるには、定相定めて知り難き所なり。

〔八二頁上段六行目〕

仍入唐間。其時隨時唐土大師沙門元慶和尚弟子恵則問曰。天親菩薩所立給四種本地何。
仍ち入唐の間、其の時随時に唐土大師沙門元慶和尚の弟子恵則に問うて曰く、「天親菩薩給う所立の四種の本地とは何ぞ」と。

〔八二頁上段八行目〕

答。日本人不知之耶否耶。

答う。「日本国の人これを知らざるや否や」と。

〔八二頁上段八行目〕

珍答曰。更全不知之。是故我今問之。

珍は答えて曰く、「更に全くこれを知らず。是の故に我れ今これを問う」と。

〔八二頁上段九行目〕

時答曰。以於胎藏与金剛両部可案従之者也。云云

時に答えて曰く、「胎藏と金剛との両部を以てこれを案従すべき者なり」と云云。

〔八二頁上段一〇行目〕

問。其何。

問う。「其れ何ぞ」と。

〔八二頁上段一〇行目〕

答曰。法華与真言雖多途。大道顕之者其一也。云云

答えて曰く、「法華と真言とは多途と雖も、大道これを顕すは其れ一なり」と云云。

〔八二頁上段一一行目〕

問。其何。

問う。「其れ何ぞ」と。

〔八二頁上段一一行目〕

答曰。以兩部配本迹二門。本迹二門雖道二大道更顯一耳。云云

答えて曰く、「兩部を以て本迹の二門を配するに、本迹の二門は道二なりと雖も大道更に一を顯すのみ」と云云。

〔八二頁上段一二行目〕

問。其何。

問う。「其れ何ぞ」と。

〔八二頁上段一三行目〕

答曰。今問何耶。^③

答えて曰く、「今何を問いけるや」と。

〔八二頁上段一三行目〕

答曰。珍法華論四人名義何。

答えて曰く、「珍は『法華論』の四人の名義何ぞ」と。

〔八二頁上段一三行目〕

答曰。一決定。二上慢。三退大。四応化。云云

答えて曰く、「一は決定、^{③①}二は上慢、^{③②}三は退大、^{③③}四は応化なり」と云云。

〔八二頁上段一四行目〕

問。其本地何。

問う。「其の本地何ぞ」と。

〔八二頁上段一四行目〕

答曰。以胎藏思之者四種阿字在之。以之名四種声聞人。以金剛部思之者。一弥勒。二文殊。三観音。四普賢也。以之四種声聞人為本地。云云

答えて曰く、「胎藏を以てこれを思わば四種の阿字^{③⑤}これ有り。これを以て四種の声聞人と名づく。金剛部を以てこれを思わば、一には弥勒、二には文殊、三には観音、四には普賢なり。これを以て四種の声聞人は本地と為す」と云云。

〔八二頁下段一行目〕

問。四種阿字者何耶。

問う。「四種の阿字とは何ぞや」と。

〔八二頁下段一行目〕

答。阿在於四名。一本不生阿字。本不生空寂理。二寂靜阿字。本不生行。三遍際不可得阿字。本不生涅槃形。四遠離不可得阿字。大道案置之。入秘密藏海說一大事因縁之四種阿字名四種曼荼羅耳。云云

答う。「阿に四名在り。一に本不生の阿字。本不生の空寂理。二に寂靜の阿字。本不生の行。三に遍際不可得の阿字。本不生の涅槃形。四に遠離不可得の阿字。大道これを案置す。秘密藏の海に入りて一大事因縁の四種の阿字を説くことを四種曼荼羅と名づくるのみ」と云云。

〔八二頁下段四行目〕

次曰。法華肝心以之名阿字。此有四種名。云云

次に曰く、「法華の肝心これを以て阿字と名づく。此れに四種の名有り」と云云。

〔八二頁下段五行目〕

以次第阿字名四種声聞次第名号。

次第の阿字を以て四種声聞の次第の名号を名づく。

〔八二頁下段六行目〕

仍定林寺大阿闍梨曰。法華阿若宣肝心。以阿若一字天親菩薩立四種声聞。云云

仍ち定林寺の大阿闍梨曰く、「法華は阿若の肝心を宣ぶ。阿若の一字を以て天親菩薩は四種声聞を立つ」と云云。

〔八二頁下段八行目〕

是故以胎藏四種阿字。金剛部意名弥勒觀音文殊普賢。両部雖異大道一也。

是の故に胎藏の四種の阿字を以て、金剛部の意を弥勒、觀音、文殊、普賢と名づく。両部は異なると雖も大道は一なり。

〔八二頁下段九行目〕

問。其本義何。

問う。「其の本義何ぞ」と。

〔八二頁下段九行目〕

答曰。雖多諸法無過莫字之。是故以第四之阿字名応化声聞。時号応化前三大声聞化之成大乘声聞耳。以金剛部旨思之者。以大日名普賢名応化。第四声聞。以普賢延命号応化声聞。化前三大声聞之成大乘声聞人耳。是本仏垂迹也。云云

答えて曰く、「諸法多しと雖も莫字これを過ぐることに無し。是の故に第四の阿字を以て応化声聞と名づく。時に応化と号して前の三大声聞これを化する大乘声聞と成るのみ。金剛部の旨を以てこれを思わば、大日を以て普賢と名づけ応化と名づく。第四の声聞は、普賢延命を以て応化声聞と号して、前の三大声聞これ化する大乘声聞の人と成るのみ。是れ本仏の垂迹なり」と云云。

〔八二頁下段一四行目〕

問。猶其深義何。

問う。「なお其の深義何ぞ」と。

〔八二頁下段一四行目〕

答曰。以大日普賢名天親菩薩。迹名顯釈迦尊。是故靈山釈迦自所説為滅後衆生出世弘之。論師顯天親菩薩造論耳。已上

答えて曰く、「大日普賢を以て天親菩薩と名づけて、迹名は釈迦尊と顯る。是の故に靈山の釈迦自らの所説、滅後の衆生の為にして出世してこれを弘む。論師は天親菩薩と顯れて論を造るのみ」と已上。

〔八三頁上段一行目〕

時珍曰。任明理心具之。

時に珍曰く、「明理に任せて心にこれを具す」^④と。

〔八三頁上段一行目〕

仍問曰。在證耶否耶。

仍ち問うて曰く、「證在るや否や」と。

〔八三頁上段一行目〕

答曰。法華八年別部在一經名菩薩明普賢清淨虛空藏会陀羅尼經。云云

答えて曰く、「法華八年の別部に一經在り。『菩薩明普賢清淨虛空藏会陀羅尼經』と名づく」と云云。

〔八三頁上段三行目〕

是故経曰。我畢此説後具可入涅槃。而我滅度後衆生猶為化之我被号天親菩薩。将可出世。其時即説呪曰。阿阿一心諸子莎呵。爾時一切諸子名阿若等。云云

是の故に『経』に曰く、「我れ此の説を畢いける後、具に涅槃に入るべし。而して我れ滅度の後、衆生なおこれを化せんが為に我れ天親菩薩と被り号して、将に出世せんとすべし。其の時、即ち呪を説きて曰く、〈阿阿一心諸子莎呵〉⁴⁶と。爾の時、一切諸子を阿若と名づく」等云云。

〔八三頁上段六行目〕

今謹案上来伝曰。従本心大日普賢⁴⁷一根所出枝葉者名法華会上決定性四人。具案四人者。応化者本仏一根尋前三人者垂迹人。尋決定上慢等其名出於迹名。全非本名。

今謹んで上来の伝を案ずるに曰く、本心の大日普賢の一根より出でる所の枝葉の者を、法華会上の決定性の四人と名づく。具に四人の者を案ずるに、応化の者は本仏の一根にして前の三人の者を尋ぬる垂迹の人なり。決定、上慢等を尋ねて其の名は迹名を出す。全く本名に非ず。

〔八三頁上段九行目〕

仍今案大乘声聞有無者。無者迹名名大。大乘声聞無之。發迹顯本具有大乘声聞名。応化名非新記名。只限旧聖。仍ち今、大乘声聞の有無を案ずるには、無とは迹名を大と名づけるに、大乘声聞これ無し。發迹顯本して具に大乘声聞の名有り。応化の名は新記の名に非ず、只だ旧聖に限る。

〔八三頁上段一一行目〕

前三大声聞案行形者。雖本地旧聖三世九世念念只限新記。

前の三大声聞の行形を案ずるには、本地は旧聖と雖も三世九世の念念は只だ新記に限る。

〔八三頁上段一二行目〕

故案胎藏廻轉九重莫字者。大悲門為宗故是応化限旧聖。前三人輩限新記。不通旧聖。

故に胎藏廻轉の九重の莫字を案ずるには、大悲門を宗と為すが故に是れ応化は旧聖に限る。前の三人の輩は新記に限りて旧聖に通ぜず。

〔八三頁上段一四行目〕

謹以案於金剛部本形者以大智門為宗。是故尋大乘声聞名者具通旧聖与新記二。

謹んで以て金剛部の本形を案ずるには大智門を以て宗と為す。是の故に大乘声聞の名を尋ねば具に旧聖と新記との二に通ず。

〔八三頁上段一六行目〕

而後案思之者。金剛界意大智上立大悲旨。大悲故旧聖与新記立各別旨。大智故顯本地。共顯大乘声聞。四種共立大日普賢故。胎藏界意其旨限大悲故不通大智。故三世九世念念名不生一理。故応化三世名応化。前三人亦然。雖云開權顯実未云全発迹顯本。新記大乘声聞者限迹名。不通旧聖。一理上不云顯本。故於生身得忍義未顯法身常住之義。⁵⁴開權顯実義全非旧聖大乘声聞義。

而る後これを案ずるに思わば、金剛界の意は大智の上に大悲の旨を立つ。大悲の故に旧聖と新記とは各おの別の旨を立つ。大智の故に本地を顯す。共に大乘声聞を顯す。四種共に大日普賢を立つが故なり。胎藏界の意は其の旨を大悲に限るが故に大智に通ぜず。故に三世九世の念念は不生の一理と名づく。故に応化は三世を応化と名づく。前の三人も亦た然り。開權顯実と云うと雖も未だ全く発迹顯本と云わず。新記の大乘声聞は迹名に限りて旧聖に通ぜず。一理の上に顯本と云わず。故に生身得忍の義において未だ法身常住の義を顯さず。開權顯実の義は全く旧聖の大乘声聞の義に非ず。

〔八三頁下段七行目〕

今案大師正意与六祖所解之者。大師若従自行文承六祖釈云。此用今家所立之名而以発迹釈義。仍除開三。得記已則名生身得忍菩薩故也等。文

今大師の正意と六祖の所解とをこれ案ずるには、大師の「若しの自行に従らば⁵⁵」との文を六祖承けて釈して云く、「此れ今家所立の名を用いて発迹を以て義を釈するに、仍ち開三を除く。記を得已りて則ち生身得忍の菩薩と名づくるが故なり」⁵⁶等文。

〔八三頁下段一〇行目〕

今謹案之者。宣金剛界大智門上立大悲故具存此旨給也。顯旧聖大乘声聞時除新記名之云也。

今謹んでこれを案ずるには、金剛界の大智門の上に大悲を立つと宣ぶが故に、具に此の旨を存じ給うなり。旧聖の大乘声聞を顯す時に新記の名を除くことこれを云うなり。

〔八三頁下段一一行目〕

是故法華云。時我及衆僧俱出靈鷲山。云云

是の故に『法華』に云く、「時に我れ及び衆僧は俱に靈鷲山に出ずるなり」^{⑤⑧}と云云。

〔八三頁下段一二行目〕

六祖所判云。頭角声聞本是菩薩。如富樓那等。菩薩本是古仏。如文殊等。並屈曲施設故云權巧等。云云

六祖の所判に云く、「頭角の声聞は本より是れ菩薩にして、富樓那等の如し。菩薩は本より是れ古仏にして、文殊等の如し。並びに屈曲は施設なるが故に權巧と云う」^{⑤⑨}等云云。

〔八三頁下段一四行目〕

決曰。大師宣大乘声聞有無旨。今開三顯一正意為決定退大声聞令成大乘声聞。自行既立即能応化声聞。若得此意即達有無也。云云^{⑥①}

決して曰く、大師は大乘声聞の有無の旨を宣びて、「今の開三顯一の正意は、決定、退大の声聞を大乘声聞と成さしめんが為なり。自行既に立つは即ち能の応化声聞なり。若し此の意を得ば即ち有無に達するなり」^{⑥②}

と云云。

〔八三頁下段一七行目〕

六祖所解曰。応化約垂迹全語旧聖。仏道約利他語新記者等。文

六祖の所解に曰く、「応化は垂迹に約して全く旧聖を語る。仏道は利他に約して新記を語る者なり」等文。⁶³

〔八四頁上段一行目〕

是宣胎藏本不生一理也。大師与六祖所解前後合。令宣胎藏与金剛二旨。

是れ胎藏の本不生の一理を宣ぶなり。大師と六祖の所解とは前後に合して、胎藏と金剛との二つの旨を宣はしむ。

〔八四頁上段三行目〕

迷後学者所迷此也。末代学者全不可異濫。是故迷後学徒伝千金。全莫伝此旨耳。已上

迷う後の学者の迷わん所此なり。末代の学者は全く異濫すべからず。是の故に迷う後の学徒は千金を伝えて、全く此の旨を伝うること莫きのみ。已上

〔八四頁上段五行目〕

問曰。何故迹門胎藏意旧聖限第四。不通新記。何故金剛部意名旧聖与新記共大乘声聞耶。⁶⁴

問うて曰く、「何故ぞ迹門の胎藏の意は旧聖を第四に限りて、新記に通ぜざるや。何故ぞ金剛部の意は旧聖

と新記とを共に大乘声聞と名づくるや」と。

〔八四頁上段六行目〕

答。謹曰。迹門阿字顯別教教門内教文故旧聖限第四。垂迹權用故前三人教文意限新記大乘声聞。未通旧聖。迹門意前三人未顯本仏普賢阿若故是名本仏不思議力耳。次謹案金剛部曰。大綱立大日觀心故悉以諸子名大日普賢。是故安置諸子入秘密藏。仍旧聖与新記共名大乘声聞。已上

答う。「謹んで曰く、迹門の阿字は別教の教門内の教文を顯すが故に旧聖を第四に限る。垂迹權用の故に前の三人の教文の意は新記の大乘声聞に限りて、未だ旧聖に通ぜず。迹門の意は前の三人未だ本仏普賢の阿若を顯さざるが故に、是れを本仏の不思議力と名づくるのみ。次に謹んで金剛部を案ずるに曰く、大綱は大日の觀心を立つが故に悉く諸子を以て大日普賢と名づく。是の故に諸子を安置して秘密藏に入る。仍ち旧聖と新記とを共に大乘声聞と名づく」と已上。

〔八四頁上段一三行目〕

問。大乘声聞有無義通本迹二門耶。

問う。「大乘声聞有無の義は本迹の二門に通ずるや」と。

〔八四頁上段一三行目〕

答。謹曰。^⑥全不通。

答う。「謹んで曰く、全く通ぜず」と。

〔八四頁上段一四行目〕

問。何故爾耶。

問う。「何故ぞ爾るや」と。

〔八四頁上段一四行目〕

答曰。本門意一切諸子名大乘声聞顯大日普賢。故迹門意於決定退大声聞令成大乘声聞故。大乘声聞名唯限於新記。不通旧聖垂迹權用故不名以内秘外現大乘声聞故。從始鹿苑終至于迹門未云内秘外現人故。本門始顯故。是故旧聖無大乘声聞名。新記始顯之耳。

答えて曰く、「本門の意は一切諸子を大乘声聞と名づけて大日普賢を顯す。故に迹門の意は決定、退大の声聞を大乘声聞と成さしめんが故なり。大乘声聞の名は唯だ新記に限る。旧聖に通ぜずして垂迹は權用の故に内秘外現を以て大乘声聞と名づけざるが故なり。始め鹿苑より終り迹門に至りて未だ内秘外現の人と云わざるが故なり。本門に始めて顯すが故なり。是の故に旧聖には大乘声聞の名無く、新記に始めてこれを顯すのみ」と。

〔八四頁下段二行目〕

問。新記大乘声聞顯名何。

問う。「新記の大乘声聞の顯名とは何ぞ」と。

〔八四頁下段三行目〕

答。謹曰。迹門三世九世念念決定退大聲聞。始從本仏心智終至于今日名大乘声聞。顯名未云大日普賢阿若。故大乘声聞名唯⁶⁷限新記耳。已上

答う。「謹んで曰く、迹門の三世九世の念念は決定、退大の声聞なり。始め本仏の心智より終り今日に至りて大乘声聞と名づく。顯名は未だ大日普賢の阿若と云わず。故に大乘声聞の名は唯だ新記に限るのみ」と已上。

〔八四頁下段六行目〕

問。大乘声聞立本迹兩門方何。

問う。「大乘声聞を本迹兩門に立つは方に何ぞ」と。

〔八四頁下段六行目〕

答。謹曰。以迹門大乘声聞本門時以之名大乘声聞。

答う。「謹んで曰く、迹門の大乘声聞を以て本門の時にこれを以て大乘声聞と名づく」と。

〔八四頁下段七行目〕

問。何爾耶。

問う。「何ぞ爾るや」と。

〔八四頁下段七行目〕

答。尋於迹門大乘声聞本地顕之。尋於本門大乘声聞本地大日普賢上立声聞名顕之。迹門未爾。是故以迹門大乘声聞本地本門時以為所聞耳。已上

答う。「迹門の大乘声聞の本地を尋ねてこれを顕す。本門の大乘声聞の本地を尋ねて、大日普賢の上に声聞の名を立ちてこれを顕す。迹門は未だ爾らず。是の故に迹門の大乘声聞の本地を以て、本門の時に以て開く所と為すのみ」と已上。

〔八四頁下段一一行目〕

問。大師所立仏道声聞与法華論所立応化声聞可名之耶。

問う。「大師所立の仏道声聞と『法華論』所立の応化声聞とはこれを名づくべきや」と。

〔八四頁下段一二行目〕

答。謹曰。於此有二途。本迹両門。迹門時仏道声聞於新記非第四応化。以新記大乘声聞名仏道大乘声聞故。本門意仏道与応化無差殊耳。

答う。「謹んで曰く、此において二途有り。本迹の両門なり。迹門の時に仏道の声聞は新記において第四の応化に非ず。新記の大乘声聞を以て仏道の大乗声聞と名づくるが故なり。本門の意は仏道と応化とに差殊無きのみ」と。

〔八四頁下段一四行目〕

而後案大師所立五種声聞者。法華論云四種声聞。未云仏道名。經有決定退大之名令成大乘声聞上立仏道之名。決定等声聞成大乘声聞。以仏道声於所化衆令聞說法声。經声聞名限仏道声聞。大師經論總合⁶⁸。論立四種之称經立一種名。

而る後、大師所立の五種声聞を案ずるには、『法華論』には四種声聞と云いて、未だ仏道の名を云わず。『經』に決定、退大の名有るを大乘声聞と成さしめて上に仏道の名を立つ。決定等の声聞は大乘声聞と成る。仏道の声を以て所化衆においては説法の声を聞かしむ。『經』の声聞の名は仏道の声聞に限る。大師は經論を総べて合す。『論』には四種の称を立ちて『經』には一種の名を立つ。

〔八五頁上段二行目〕

仍大師所立論四種上加一仏道立五種之声聞名。名雖有五種其本末爾耳。本門意第四第五無差殊。故共名大乘声聞大日普賢耳。已上

仍ち大師の所立は『論』の四種の上に一つ仏道を加えて五種の声聞の名を立つ。名は五種有りと雖も其の本末は爾るのみ。本門の意は第四第五に差殊無し。故に共に大乘声聞、大日普賢と名づくるのみ。已上

〔八五頁上段六行目〕

有書曰。立大乘声聞有無二名。於此有二途。一限迹門。二亘本迹二門。本迹二門有無者。迹門於旧聖立大乘声聞無義。本門於此立大乘声聞有義耳。已上

有る書に曰く、「大乘声聞を立ちて有無の二名あり。此において二途有り。一は迹門に限りて、二は本迹の二門に亘る。本迹の二門の有無とは、迹門は旧聖において大乘声聞無の義を立つ。本門は此において大乘声

聞有の義を立つのみ」^⑩と已上。

〔八五頁上段九行目〕

問。迹門意応化名名迹名何人耶。

問う。「迹門の意は応化の名を迹名と名づくるは何人たるや」と。

〔八五頁上段九行目〕

答。指満願羅云等具名応化耳。已上

答う。「満願^⑪、羅云^⑫等を指して具に応化と名づくるのみ」と已上。

〔八五頁上段一〇行目〕

以之可准知本門耳。已上

これを以て本門に准じて知るべきのみ。已上

〔八五頁上段一〇行目〕

問。迹門意決定性声聞成妙覺三身如来耶否耶。

問う。「迹門の意は決定性の声聞は妙覺三身の如来と成るや否や」と。

〔八五頁上段一一行目〕

答曰。全不成。

答えて曰く、「全く成らず」と。

〔八五頁上段一二行目〕

問。其意何。

問う。「其の意何ぞ」と。

〔八五頁上段一二行目〕

答。謹曰。莫字教門上立大悲門行形。此故決定声聞在会上。不成如来三身一身成仏道耳。

答う。「謹んで曰く、莫字の教門の上に大悲門の行形を立つ。此の故に決定声聞は会上に在り。如来三身の一身に仏道を成ずることを成さざるのみ」と。

〔八五頁上段一四行目〕

問。在證耶否耶。⁷³

問う。「證在るや否や」と。

〔八五頁上段一四行目〕

答曰。羅什三藏法華義記曰。声聞取大悲形故不成極果形耳。云云

答えて曰く、「羅什三藏の『法華義記』⁷⁴に曰く、〈声聞は大悲の形を取るが故に極果の形と成らざるのみ〉

と」と云云。

〔八五頁上段一五行目〕

某請曰。⁷⁵迷後學者伝千金莫伝之耳。已上

某は請うて曰く、「迷う後の学者は千金を伝えてこれを伝うること莫きのみ」と已上。

〔八五頁上段一七行目〕

有書曰。謹伝正義曰。大悲門故一切諸子莫帰本地大日之智海。以之於此宗名優曇華。是故決定性声聞全不成如来三身一身心念。而以一例諸耳。已上

有る書に曰く、「謹んで正しく義を伝えて曰く、大悲門の故に一切諸子は本地たる大日の智海に帰すること莫し。これを以て此の宗において優曇華と名づく。是の故に決定性の声聞は全く如来三身の一身の心念を成ぜず。而して一を以て諸を例するのみ」⁷⁶と已上。

〔八五頁下段三行目〕

疑曰。不有證據以何為信耶。

疑いて曰く、「證據有らざるに何を以て信と為すや」と。

〔八五頁下段三行目〕

答。謹曰。一行阿闍梨瑜伽一卷義記引羅什三藏法華義記曰。

答う。「謹んで曰く、一行阿闍梨の瑜伽一卷の義記に羅什三蔵の『法華義記』を引きて曰う」^{②7}と。

〔八五頁下段四行目〕

問。莫字九重大悲阿若意一切諸子帰本地心智耶否耶。

問う。「莫字九重の大悲の阿若の意は一切諸子を本地の心智に帰するや否や」と。

〔八五頁下段五行目〕

答。未其旨爾。

答う。「未だ其の旨爾らず」と。

〔八五頁下段六行目〕

問。何。

問う。「何ぞ」と。

〔八五頁下段六行目〕

答曰。条如此旨者顕優曇華形体。優者名無字。曇者名帰入字。華者名大日二字。迹名曰優曇華。顕体曰吉哩吉梨。吉者名無哩者名帰。吉者名大梨者名日耳。已上

答えて曰く、「此の如き旨に条るは優曇華の形体を顕す。優とは無字と名づく。曇とは帰入字と名づく。華とは大日の二字と名づく。迹の名には優曇華と曰う。顕体には吉哩吉梨と曰う。吉とは無と名づく。哩とは

帰と名づく。吉とは大と名づく。梨とは日と名づくるのみ」と已上。

〔八五頁下段九行目〕

今謹案。優曇華故諸子更無成仏道。

今謹んで案するに、優曇華の故に諸子更に仏道を成ずること無し。

〔八五頁下段一〇行目〕

仍今案曰。優曇華開三千年一度者。迹門意従大通仏時終至于迹門初住位得初住阿字。是以是名優曇華爾耳。已上。

仍ち今案ずるに曰く、優曇華の三千年に一度開くとは、迹門の意は大通仏の時より終り迹門の初住の位に至りて初住の阿字を得。是を以て是を優曇華と名づくること爾のみ。已上。

〔八五頁下段一二行目〕

某自曰。謹曰。迷後学者伝千金莫伝之耳。已上

某は自ら曰く、「謹んで曰く、迷う後の学者は千金を伝えてこれを伝うること莫きのみ」と已上。

〔八五頁下段一四行目〕

問。法華已前説四称声聞本地耶否耶。

問う。「法華已前に四種声聞の本地を説くや否や」と。

〔八五頁下段一四行目〕

答。謹曰。分途一云。四種共名鹿苑證果儀式。是故豎入途無說此旨。二横入意一代五時。五時節節說五時。是故有之耳。已上

答う。「謹んで曰く、途を分けて一に云く、四種は共に鹿苑の證果の儀式に名づく。是の故に豎入の途は此の旨を説くこと無し。二に横入の意は一代五時なり。五時は節節に五時を説く。是の故にこれ有るのみ」と已上。

〔八五頁下段一七行目〕

問。如此旨在證耶否耶。

問う。「此の如き旨の證在るや否や」と。

〔八五頁下段一七行目〕

答。一行阿闍梨義決引羅什三藏法華義記曰。時時在五時。迷後門人不可共之耳。⁽⁸⁰⁾ 已上。

答う。「一行阿闍梨の『義決』⁽⁸¹⁾に羅什三藏の『法華義記』を引きて曰く、〈時時に五時在り。迷う後の門人は共にこれとすべからざるのみ〉⁽⁸²⁾と」と已上。

〔八六頁上段二行目〕

今案之明理在之耳。已上。

今これを案ずるに明理これ在るのみ。已上。

〔八六頁上段三行目〕

問。上慢等人何故去法華座耶。

問う。「上慢等の人は何故ぞ法華の座を去るや」と。

〔八六頁上段三行目〕

答。天台四教抄後記四云。上慢者名於觀音。觀音大悲九重大士故示形声聞起座去畢。是旨名大日普賢毘盧遮那仏方便不思議力也。已上

答う。『天台四教抄』後記四に云く、^⑧（上慢とは觀音に名づく。觀音は大悲九重の大士なるが故に形を声聞として座を起ち去畢す。是の旨を大日普賢、毘盧遮那仏の方便不思議力と名づくるなり）と」已上。

〔八六頁上段六行目〕

今謹案此旨明理在此。仍迷後學者不可異濫此旨。伝千金全莫伝之耳。已上

今謹んで此の旨を案ずるに明理此に在り。仍ち迷う後の學者は此の旨を異濫すべからず。千金を伝えて全くこれを伝うること莫きのみ。已上

〔八六頁上段八行目〕

問。既不成仏耶。

問う。「既に成仏せざるや」と。

〔八六頁上段八行目〕

答。成仏。

答う。「成仏す」と。

〔八六頁上段八行目〕

問。意何耶。

問う。「意何ぞや」と。

〔八六頁上段八行目〕

答。大智^ま字故。於何処有不成仏之義耶。已上

答う。「大智は^ま字の故なり。何処において不成仏の義有るや」と已上。

〔八六頁上段一〇行目〕

問。天親所造四種声聞称鹿苑時名決定性。方等般若時名退大。法華時名応化者為実。何以今日為悟此何。

問う。「天親所造の四種声聞の称は鹿苑の時に決定性と名づく。方等、般若の時に退大と名づく。法華の時に応化と名づくるは実と為すや。何を以て今日に悟と為すや。此れ何ぞ」と。

〔八六頁上段一二行目〕

答曰。爾前未云爾。以今日推尋⁸⁵之耳。已上。

答えて曰く、「爾前には未だ爾りと云わず。今日を以て尋ねてこれを推すのみ」と已上。

〔八六頁上段一二行目〕

問。法華已前明決定性成仏耶否耶。

問う。「法華已前に決定性の成仏を明かすや否や」と。

〔八六頁上段一三行目〕

答。在明意在不明意。

答う。「明意在りて不明意在り」と。

〔八六頁上段一四行目〕

問。何意耶。

問う。「何の意なるや」と。

〔八六頁上段一四行目〕

答。以一代節節可案徒之耳。已上。

答う。「一代の節節を以てこれに案徒すべきのみ」と已上。

「八六頁上段一四行目」

謹曰。以此旨一行菩薩顯大日如來本地三身一身旨。四土不二道理久遠実成本形悟之所。迷後學者伝千金全莫伝之。若伝上來誓者似自切舌者也。見此旨輩在時不信用之者墮在無間地獄不疑耶。仍今謹四種声聞日記明此了耳。云云

謹んで曰く、此の旨を以て一行菩薩は大日如來の本地たる三身一身の旨を顯す。四土不二の道理は久遠実成の本形これを悟る所なり。迷う後の學者は千金を伝えて全くこれを伝うること莫れ。若し上來の誓を伝わば自ら舌を切るに似たる者なり。此の旨を見る輩在る時これを信用せざる者は無間地獄に墮ちて在らんこと疑わざるや。仍ち今謹んで『四種声聞日記』をここに明かし了んぬるのみ。云云

「八六頁下段三行目」

註云。上來至于今書此人具成誓言可書之者也。後見學者莫伝之耳。⁸⁶仍誓言了。已上。

註に云く、上來を今に至りて此れを書す人は具に誓言を成じてこれを書すべき者なり。後に見る學者はこれを伝うること莫きのみ。仍ち誓言を了んぬ。已上。

「八六頁下段六行目」

四種声聞日記

入唐沙門円珍於延曆寺山王院記之

四種声聞日記

円珍『法華論四種声聞日記』をめぐって（浅野）

円珍『法華論四種声聞日記』をめぐって（浅野）

六〇

入唐沙門円珍、延暦寺山王院においてこれを記す。

〔八六頁下段九行目〕

從元慶七年三月二十八日至于同三十日案記之。此丘良猷⁸⁷授了。汝成老疲齡德恒勿露斯矣。

元慶七年三月二十八日より同三十日に至りてこれを案記す。比丘良猷は授了す。汝は老疲齡德と成り、恒に斯れを露とすること勿れ。

〔八六頁下段一〇行目〕

可秘之可秘之。若此書流布世於一代聖教論議經壞識者也。故強禁之。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。⁸⁸

これを秘すべし。これを秘すべし。若し此の書世に流布せば一代の聖教において論議經を悉く滅する者なり。故に強くこれを禁ず。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

※なお、『日本大藏經』には尾題がないが、『智証大師全集』には「法華論四種声聞日記□終」と尾題がある。

校異等について

先述の通り、三種の活字本の内に二つの系統があることに基づいて、右の国訳では『日本大藏經』と『智証大師全集』との対校を行った。両テキストの異なりに関して述べると、まず一つに著者名の表記が異なっていた。『日本大藏經』では「入唐沙門□円珍□叙」と表記されているのに対して、『智証大師全集』では「山王院円珍」と表記されていた。文字の異同に関しては総じて十九箇所が確認され、『智証大師全集』の方にやや誤脱が散見

された。句点の打ち方に関しては『智証大師全集』の方が文章をより細かく区切っていたが、明らかに間違った打ち方をしている箇所も見られた。送り仮名に関しては『日本大藏經』の方にはよく付されていたが、『智証大師全集』ではほとんど見られなかった。傍注の異本注記に関しては『日本大藏經』の方により多く見られた。奥書の配置に関しては『日本大藏經』の表記は適切であったが、『智証大師全集』では本文と区別し難い表記となっていた。

全体としては『日本大藏經』の方が誤脱が少なく、また送り仮名や傍注等の情報も多かった。テキストとしては『日本大藏經』の方がより整っている印象があり、学術的には『智証大師全集』よりも『日本大藏經』の方が推奨されるであろう。しかしながら、『智証大師全集』に誤脱が見られがちであったとはいえ、『日本大藏經』にも誤脱が全くないわけではないで、その点は注意が必要である。

活字本以外の対校本としては、大正大学所蔵の寛文二年刊の刊本を用いた。寛文二年刊本は、活字本の『日本大藏經』とも『智証大師全集』とも完全に一致はせず、またどちらの活字本に近いとも俄かには言い難い。しかしながら、刊本と二種の活字本とは全体的にテキストとしては大きく異ならない。

寛文二年刊本には活字本にない情報として、表紙の題簽や朱書きの外題があり注目される。この刊本の題簽には、『小部集釈』『教相同異集』『阿弥陀観心』『読経用心』との表記が見られ、また朱書きの外題には『円融仏智』『極楽問答』『四種声聞』『妙悟決』『法華略観』『一念頌決』と表記されている。このことからまず、寛文二年刊本が『天台小部集釈』であることがわかる。『天台小部集釈』は、天台家の宗義に関する文献の内、比較的部帙の小さいものを集めた叢書であり、計六十六部六十八巻から成っている。

寛文二年刊本では、先述の通り『四種声聞記』の他に五部の文献を収録している。『円融仏智』は覚超（九六〇—一〇三四）の『円融仏意集』であり、『極楽問答』は覚超の『往生極楽問答』であり、『妙悟決』は最澄疑問、

道邃（生没年不詳）決義の『天台法華宗生知妙悟決』であり、『法華略観』は源信（九四二—一〇一七）のそれであり、『一念頌決』は覚超のそれである。『四種声聞記』がこれらの文献と共に収録されており、また、題簽に「教相同異集」「阿弥陀観心」とあることや、『四種声聞記』の本文中に「南無阿弥陀仏」の語が見られることから、『四種声聞記』が浄土教的性格を含んだ著述であることがより示唆されるのである。

六、『法華論四種声聞日記』『阿若集』の共通する記述

先述のとおり、三崎良周「一九七八」の研究によると、『四種声聞記』には『阿若集』と共通する語句が頻りに見出されるという^⑨。その共通する語句について、具体的に整理をしておくこと次の対照表のようになる。なお、『四種声聞記』の原文は、増補改訂版『日本大蔵経』第八十巻所収のテキストから引用し、『阿若集』の原文は、覆刻版『大日本仏教全書』第二十八冊所収のテキストから引用して、丸括弧（ ）の中には該当頁数および上下を表記した。

『四種声聞記』	『阿若集』
<p>以金剛部旨思之者。以大日名普賢名応化。第四声聞。以普賢延命号応化声聞（八二頁下）</p>	<p>瑜伽最深密処。即法華常住靈山故。或時普賢延命。三世有毒心。令即證菩提。円融字者。於普賢延命真言。可案之（二二七頁下） 我今一書了一行阿闍梨。一菩薩在世。名号普賢延命（二二七頁下） 是普賢延命力也（二二七頁下）</p>

<p>雖本地旧聖三世九世念只限新記（八三頁上） 故三世九世念念名不生一理（八三頁上） 迹門三世九世念念決定退大声聞（八四頁下）</p>	<p>宣三世九世久遠常恒旨（一二一六頁上）</p>
<p>大悲門為宗故是応化限旧聖（八三頁上） 大悲門故一切諸子莫歸本地大日之智海（八三頁上）</p>	<p>問。云大悲修行之意如何。答。衆生是久遠衆生。一理是無始一理。是大悲門故。修修未成仏（一二一五頁下） 今人者三世常恒大悲修行者也。故大悲門（一二一六頁上） 次菩薩大悲門身。是果縛身也（一二一六頁上） 答曰。大悲門衆生也。此衆生大毘盧舍那垂迹是也（一二一六頁下）</p>
<p>謹以案於金剛部本形者以大智門為宗（八三頁上） 宣金剛界大智門上立大悲故具存此旨給也（八三頁下） 迷後學者所迷此也。末代學者全不可異濫。是故迷後学徒伝千金。全莫伝此旨耳（八四頁上） 某謹曰。迷後學者伝千金莫伝之耳（八四頁上） 某自曰。謹曰。迷後學者伝千金莫伝之耳（八五頁下） 仍迷後學者不可異濫此旨。伝千金全莫伝之耳（八六頁上） 迷後學者伝千金全莫伝之（八六頁上） 後見學者莫伝之耳（八六頁下）</p>	<p>是大智顯說門之意有歟（一二一六頁上） 釈云。此經有龍宮城未伝。但今文龍樹者者。秘書此。尤此經密故也。經名曰維摩羅樹吉藏陀留摩經也。私我決曰。上乘所説与我説全未異。末代後學。雖伝千金。莫全伝此（一二一六頁下） 如是三種教觀。是瑜伽最深意。末代後學。秘可申者也（一二一八頁上）</p>
<p>一行阿闍梨瑜伽一卷義記引羅什三藏法華義記曰（八五頁下） 一行阿闍梨義決引羅什三藏法華義記曰（八五頁下） 以此旨一行菩薩顯大日如來本地三身一身旨（八六頁上）</p>	<p>傳云。唐土一行阿闍梨是也（一二一六頁下） 重伝受唐土一行阿闍梨（一二一七頁上） 故阿闍梨書云（一二一七頁上） 我今一書了一行阿闍梨。一菩薩在世。名号普賢延命（一二一七頁下）</p>

天台四教抄後記四云（八六頁上）	是故天台四教抄彼記云（二二一六頁上）
若伝上来誓者似自切舌者也（八六頁上）	汝破我說似舌切也。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏（二二一六頁上）
若此書流布世於一代聖教論議經壞識者也。故強禁之。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏（八六頁下）	汝破我說似舌切也。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏（二二一六頁上）

両書とも一卷からなる小部の著述であるが、共通と見られる語句を抽出するとこれだけの例があった。対象してわかるように、特徴的な術語や名詞等が両書に共通して使用されていた。このことから、両書間には相当な関連のあることが言えよう。

なお、両書の成立年代に関しては断定し難いが、『四種声聞記』には成立年代に関する記述が見られる。『四種声聞記』の本文冒頭には「元慶第七年三月二十八日^{⑨①}」という記述があり、また奥書には「入唐沙門円珍於延暦寺山王院記之」「從元慶七年三月二十八日至于同三十日案記之^{⑨②}」という記述がある。尊通『智証大師年譜』には「陽成天皇元慶…七年癸卯」の箇所に「師七十歳。三月…二十八日講四種声聞義^{⑨③}」とあり、『四種声聞記』の中の記述と日付が一致する。偽撰説のある『四種声聞記』ではあるが、『智証大師年譜』の「講四種声聞義」の記述を、円珍が『四種声聞記』を撰したことと見れば、一往の整合性はとれていると言えよう。なお、『阿若集』に関しては成立年代に関する記述は見られない。

七、『法華論四種声聞日記』における「阿字」「阿若」の使用例について

『四種声聞記』との関連が指摘されている円珍『阿若集』は、一説では題名の「阿若」が「阿字」の写誤であると云われている。⁹³ 実際に『阿若集』の本文を見ると「阿若」の語はよく用いられており、また「阿字」の語も用いられている。この「阿若」「阿字」の語については、『四種声聞記』においても術語として用いられている。ここでは『四種声聞記』において「阿若」「阿字」の語がどの程度用いられており、またどのような文脈で使われているのかについて確認し、また同様に『阿若集』での使用例についても確認したい。

初めに『四種声聞記』における「阿若」「阿字」の語について、本文中の全ての該当箇所を抽出すると、以下の通りとなる。

なお、原文および丸括弧（ ）内の頁数・上下・行数は、増補改訂版『日本大藏經』所収のテキストに依拠し、原文に続いて一字下げで国訳を示した。また、テキスト中の割注部分は、フォントを下げて表記した。また、便宜上「阿字」の箇所には傍線を付し、「阿若」の箇所には波線を付した。

『四種声聞記』該当箇所①（『日本大藏經』八二頁上段一四行目）

問。其本地何。答曰。以胎藏思之者四種阿字在之。以之名四種声聞人。以金剛部思之者。一弥勒。二文殊。三観音。四普賢也。以之四種声聞人為本地。云云

問う。「其の本地何ぞ」と。答えて曰く、「胎藏を以てこれを思わば、四種の阿字これ有り。これを以て四種の声聞人と名づく。金剛部を以てこれを思わば、一には弥勒、二には文殊、三には観音、四には普賢なり。これを以て四種の声聞人は本地と為す」と云云。

問。四種阿字者何耶。答。阿在於四名。一本不生阿字。本不生空寂理。二寂靜阿字。本不生行。三遍際不可得阿字。本不生涅槃形。四遠離不可得阿字。大道案置之。入秘密藏海說一大事因縁之四種阿字名四種曼荼羅耳。云云

問う。「四種の阿字とは何ぞや」と。答う。「阿に四名に在り。一に本不生の阿字。本不生の空寂理。二に寂靜の阿字。本不生の行。三に遍際不可得の阿字。本不生の涅槃形。四に遠離不可得の阿字。大道これを案置す。秘密藏の海に入りて一大事因縁の四種の阿字を説くことを四種曼荼羅と名づくるのみ」と云云。

次曰。法華肝心以之名阿字。此有四種名。云云

次に曰く、「法華の肝心これを以て阿字と名づく。此れに四種の名有り」と云云。

以次第阿字名四種声聞次第名号。仍定林寺大阿闍梨曰。法華阿若宣肝心。以阿若一字天親菩薩立四種声聞。云云

次第の阿字を以て四種声聞の次第の名号を名づく。仍ち定林寺の大阿闍梨曰く、「法華は阿若の肝心を宣ぶ。阿若の一字を以て天親菩薩は四種声聞を立つ」と云云。

是故以胎藏四種阿字。金剛部意名弥勒觀音文殊普賢。两部雖異大道一也。

是の故に胎藏の四種の阿字を以て、金剛部の意を弥勒、觀音、文殊、普賢と名づく。两部は異なると雖も大道は一なり。

問。其本義何。答曰。雖多諸法無過莫字之。是故以第四之阿字名応化声聞。

問う。「其の本義何ぞ」と。答えて曰く、「諸法多しと雖も莫字に過ぎること無し。是の故に第四の阿字を以て応化声聞と名づく」

『四種声聞記』該当箇所②（『日本大藏經』八三頁上段五行目）

爾時一切諸子名阿若等。

爾の時、一切諸子を阿若と名づく。

『四種声聞記』該当箇所③（『日本大藏經』八四頁上段六行目）

迹門阿字顯別教教門内教文故旧聖限第四。垂迹権用故前三人教文意限新記大乘声聞。未通旧聖。迹門意前三人未顯本仏普賢阿若故是名本仏不思議力耳。

迹門の阿字は別教の教門内の教文を顯すが故に旧聖を第四に限る。垂迹権用の故に前の三人の教文の意は新記の大乘声聞に限りて、未だ旧聖に通ぜず。迹門の意は前の三人未だ本仏普賢の阿若を顯さざるが故に是れを本仏の不思議力と名づくるのみ。

『四種声聞記』該当箇所④（『日本大藏經』八四頁下段四行目）

顯名未云大日普賢阿若。

顯名は未だ大日普賢の阿若と云わず。

『四種声聞記』該当箇所⑤（『日本大藏經』八五頁下段四行目）

問。莫字九重大悲阿若意一切諸子帰本地心智耶否耶。

問う。「莫字九重の大悲の阿若の意は一切諸子を本地の心智に帰するや否や」と。

『四種声聞記』該当箇所⑥（『日本大藏經』八五頁下段一〇行目）

優曇華開三千年一度者。迹門意從大通仏時終至于迹門初住位得初住阿字。

優曇華の三千年に一度開くは、迹門の意は大通仏の時より終り迹門の初住の位に至りて初住の阿字を得。

以上に挙げた「阿字」「阿若」の使用例が、『四種声聞記』における該当箇所の全てである。一見してもわかるように『四種声聞記』においては、「阿字」「阿若」の語が混在して使用されている。

本書は円珍と恵則の問答の形で論述されているが、恵則が四種の阿字に関して答えている段には、「法華の肝心これを以て阿字と名づく。此れに四種の名有り」とある。この後、円珍は定林寺の大阿闍梨が「法華は阿若の肝心を宣ぶ。阿若の一字を以て天親菩薩は四種声聞を立つ」と説いていることを紹介している。しかしながら、ここでの「阿字」と「阿若」との使い分けが何を意味しているのかについては判断し難いものがある。『四種声聞記』ではこうした例がいくつか見られるので問題点として挙げておく。

続いて、『阿若集』における「阿字」「阿若」の語の使用例を、先と同じように確認してみたい。なお、原文の引用等については、覆刻版『大日本仏教全書』第二十八冊所収のテキストに依拠した。

『阿若集』該当箇所①（『大日本仏教全書』一二二五頁下段四行目）

夫尋円融一実之理観疊無辺一理無辺品数。我今立三種教相理観。安置心性一理也。抑尋三種教相者。是大悲観。阿若意有此也。於大悲阿若観。有三种門。一苦道即法身門。註云始終教道意也。二苦道一理門。註云一理立教道也。云云。三始終阿字門。註云□大悲毘盧遮那説談俱体俱用旨也。又阿若三諦是可案也。三世一諦。一世大毘盧遮那。阿若一理久遠成道無始無終云云。

夫れ円融一実の理観に尋ねれば無辺の一理、無辺の品数を疊む。我れ今、三種の教相理観を立ちて心性の一理を安置するなり。そもそも尋ねれば三種の教相とは、是れ大悲観なり。阿若の意は此に有るなり。大悲の阿若観において、三種の門有り。一には苦道即法身門。註に云く、始終教道の意なり。二には苦道一理門。註

に云く、「一理に教道を立つなり」と云云。三には始終阿字門。註に云く、□「大悲毘盧遮那の説は俱体俱用の旨を談ずるなり」と。阿若の三諦是れを案すべきなり。三世の一諦は、一世の大毘盧遮那なり。阿若の一理は久遠成道の無始無終なり云云。

『阿若集』該当箇所②（『大日本仏教全書』一二一六頁上段五行目）
是初阿若断一分無明。顯一分我性。

是の初の阿若は一分の無明を断じて、一分の我性を顯す。

『阿若集』該当箇所③（『大日本仏教全書』一二一六頁下段一四行目）

初阿若具後荼。初阿若一分無明断之。断此得一。得永不失寿命也。

初の阿若に後の荼を具す。初の阿若は一分の無明これを断ず。此れを断じて一を得。得て永く寿命を失せざるなり。

『阿若集』該当箇所④（『大日本仏教全書』一二一七頁上段一三行目）

註云。久遠一仏云云。□問。始終阿若門意何耶。□答。從初一心果滿最極阿若本不生一身也。於能修行人。皆是阿若一身。於所修行法門。阿若理性也。故今於円融一実。決始終阿字門此也。

又印娑婆訶命覺如常。從阿字一身一念。萬法出生。此故阿若本不生一理。言證道円融義矣思之。瑜伽最深密處。即法華常住靈山故。

註に云く、「久遠の一仏」と云云。□問う。始終の阿若門の意は何ぞや。□答う。初の一心より果滿じて

最極の阿若本不生の一身なり。能の修行の人においては、皆な是れ阿若の一身なり。所の修行の法門においては、阿若の理性なり。故に今、円融の一実において、始終の阿字門を決すること此れなり。

引印娑婆訶、命覚は常の如し。阿字の一身一念より、万法は出生す。此の故に阿若本不生の一理は、證道の円融の義を言うることこれるを思え。瑜伽の最深密の処なり。即ち法華の常在靈山なるが故なり。

以上が『阿若集』における「阿字」「阿若」の使用例である。

『四種声聞記』『阿若集』における「阿字」「阿若」の使用例を対照してみると、まず『四種声聞記』では「阿字」「阿若」のどちらの語も同じ程度、または「阿字」の方がやや多く使用されているという程であったが、『阿若集』では明らかに「阿若」の方が多く使われていた。『阿若集』における「阿字」の使用例としては、「阿字門」「阿字の一身」という部分で使われていたに過ぎなかった。両書における「阿若」の語を仮に「阿字」と読み替えたとしても、さほど違和感がない為、「若」は「字」の字の写誤と疑われても無理はないであろう。

密教においては、一切万有の本源を示すものとして「阿字」という術語の使用は一般的であるが、「阿若」という語については、一般的には仏弟子で五比丘の一人である阿若憍陳如の名前に含まれる名詞的用法として知られている程度で、両書に見られるような術語としての「阿若」の使用例は極めて特殊である。『仏所行讚』第三転法輪品には、「以彼知法故 名阿若憍憐 於佛弟子中 最先第一悟^⑤」とあり、「阿若」という名は、悟りの際に得たものであるという。「若」の語は、*ṛā*または *jāta* の音写語であり、熟知・知識という意味があるので、「阿字」に「若」の意味合いを持たせて術語として使用している可能性がないとも言えないが、文脈から考えて「阿若」は「阿字」であつても問題がないように見受けられる。しかしながら『四種声聞記』と『阿若集』との両書において「阿若」の語が共通して見られることは興味深く、「阿若」に「阿字」とは異なった特殊な意味含

いがないとも言いきれない。

八、結び

本稿では『四種声聞記』の論述内容を中心として、本書との関連が指摘されていた『阿若集』との対照を試みた。その結果、完全に一致とまでは言えないまでも、共通する特異な術語および名詞等の使用例が両書に散見されたことや、また、両書における「阿字」「阿若」の使用例等から鑑みても、『四種声聞記』と『阿若集』との間には、その背景とする教学に高い類似のあることが看取された。

両書はそれぞれに扱うテーマが異なるが、『阿若集』が俗に『教観日記』と称されて「日記」という特異な名称が『四種声聞記』と一致している点や、文脈的な傾向からしても両書における密教的な解釈には共通点のあることが伺えた。

偽撰説のある両書であるが、論述的な特徴から鑑みてこれらが仮に偽撰であったとしても、同一人物によって著された可能性が高く、もしくは複数人による撰述であったとしても、同学派に属する者たちの間で著されたのであろう。

『四種声聞記』は、古くから源信や覚超等の著述と近い位置にあるものとして伝えられており、また本文中の用例などから鑑みても、浄土教的な性格を含んだ著述であることが示唆されるのであり、延いては『阿若集』もまた然りであろうことが『四種声聞記』との関連等から指摘出来るのである。

註

- (1) 三崎良周「一九七八」五一頁下から引用。
- (2) 『大正蔵』第二十六卷、No.1520。
- (3) 『大正蔵』第二十六卷、No.1519。
- (4) 大竹晋「二〇一」には、「なお、現存は確認されていないが、『妙法蓮華経憂波提舍』はかつて西藏文化圏において蔵訳されたことがあったらしい。近年西藏において発見された『バンタンマ目録』のうちに次のようにある。『聖妙法蓮華経釈』。軌範師ヴァスバンドゥの作。`phags pa dam pa'i chos pad ma dkar po'i bshad pa/slob dpon Ba su ban dhus ndzad pa/」（一三一一一四頁）とある。
- (5) 藤井教公「二〇〇三」三五頁から引用。
- (6) 藤井教公「二〇〇一」一二頁から引用。
- (7) 『仏書解説大辞典』第十卷、九四頁から引用。解説は渡辺最昌。
- (8) 『大日本仏教全書』（覆刻版）第二十八冊、智証大師全集四。
- (9) 『大日本仏教全書』（覆刻版）第二十八冊、二二五頁下。
- (10) 『仏書解説大辞典』第一卷、一二頁を参照。解説者は田島徳音。
- (11) 『仏書解説大辞典』第十卷、九四頁には「日本大蔵経第四一」とあるが誤植で、正確には「日本大蔵経第四三」である。
- (12) 鈴木学術財団編『大日本仏教全書』第九十七卷、解題一の三四六頁を参照。解説は多田厚隆。
- (13) 鈴木学術財団編『日本大蔵経』（増補改訂版）第一〇〇巻、目録・索引の二四二頁を確認したが、No.49『四種声聞記』の原本情報はなかった。

- (14) 『四種声聞記』の刊本に関しては『仏書解説大辞典』第十卷(九五頁)を参照。また、『天台小部集釈』の刊本に関しては同第八卷(一三一頁)を参照。
- (15) 大久保良順「一九六九」、二頁。
- (16) 同論文、三頁。
- (17) 同論文、七頁参照。
- (18) 三崎良周「一九七八」五〇頁。
- (19) 同論文、五〇頁。
- (20) 同論文、五〇頁―五一頁。
- (21) 同論文、五一頁。
- (22) 同論文、五一頁―五一頁。
- (23) 『智証大師全集』では、「入唐沙門□円珍□叙」を「山王院円珍」とする。
- (24) 寛文二年刊本には、「元」の字の前に「夫謹案」とある。
- (25) 『智証大師全集』では、「入唐沙門円珍留意一心」を「留意一心入唐沙門円珍」とする。
- (26) 寛文二年刊本には、「謹案」の語を欠き、また、「天親」の語の前に「珍」とある。
- (27) 元慶第七年 西暦八八三年。
- (28) 未 時刻では午後二時、およびその前後の二時間。
- (29) 『智証大師全集』には「元」のかわりに「無」とある。
- (30) 底本には、傍注で「令イ」と異本注記がある。
- (31) 決定 長い間に小乗を習って一度は必ず阿羅漢果を悟るべき声聞をいう。

円珍『法華論四種声聞日記』をめぐって(浅野)

- (32) 増上慢 小乗を学んで満足しており、悟っていないのに悟ったと思って慢心を起している声聞をいう。
- (33) 退大 大乘の教えに従って長い間修行を行っていたが、菩提心を失ってしまい小乗の悟り求める声聞をいう。
- (34) 応化 声聞や衆生を大乘の道に引き入れる為に、仮りに声聞の姿をとる仏や菩薩をいう。
- (35) 阿字 万有の根源を象徴した字。特に密教では不生不滅であり、万物の本源であると考ええる。宇宙万有を宗教的人格とみなし、それを象徴する文字である。
- (36) 本不生 心が初めに生じた辺際も、終わりに滅する辺際も知ることができないから、心は本来不生であることをいう。
- (37) 四種曼荼羅 密教における曼荼羅の四種。大曼荼羅、三昧耶曼荼羅、法曼荼羅、羯磨曼荼羅の四つ。
- (38) 底本には、傍注で「イ上」と異本注記がある。
- (39) 定林寺の大阿闍梨 定林寺は中国の江蘇省江寧府鍾山にある。創建年代は未詳。大阿闍梨は曇摩蜜多のことか。
- (40) 明理 真理を説明すること。
- (41) 法華八年 天台教学で、釈尊は入滅に至る最後の八年間には、『法華経』の説法のみをなされたと主張することを用う。
- (42) 未詳の文献。
- (43) 『智証大師全集』では、「而」の後に「後」の字を加える。
- (44) 『智証大師全集』には、「後」の字を欠く。
- (45) 『智証大師全集』には、「其」の字を欠く。
- (46) 莎呵 *śāhā* の音写。もとはヴェーダの祭祀において、神々に供物を捧げるときに唱えた文句。大乘仏教にとり入れられ、さらに真言密教において盛んに用いられた。
- (47) 底本には、傍注で「イ无」と異本注記がある。

- (48) 底本には、傍注で「イ无」と異本注記がある。
- (49) 底本には、傍注で「イ无」と異本注記がある。
- (50) 『智証大師全集』では、「名非」を「非名」とする。
- (51) 大乘声聞 天台教学でいう五種声聞の一つ。
- (52) 底本には、傍注で「イ輪」と異本注記がある。
- (53) 底本には、傍注で「イ无」と異本注記がある。
- (54) 『智証大師全集』には、「未顯法身常住之義」の語を欠く。
- (55) 智顗説、灌頂記『妙法蓮華經文句』に、「則謂無大乘聲聞。若從自行發迹顯本」(『大正藏』第三十四卷、四六頁中)とある。
- (56) 湛然『法華文句記』に、「此用今家所立之名。而以發迹釋義。仍除開三得記已。即名生身得忍菩薩故也」(『大正藏』第三十四卷、二二六頁下)とある。
- (57) 『智証大師全集』には、「宜」の字を欠く。
- (58) 『妙法蓮華經』如来寿量品第十六に、「時我及衆僧 俱出靈鷲山」(『大正藏』第九卷、四三頁中)とある。
- (59) 湛然『法華玄義釈籤』に、「頭角聲聞本是菩薩如富樓那等。菩薩本是古佛如文殊等。並屈曲施設故云權」(『大正藏』第三十三卷、八一七頁中)とある。
- (60) 『智証大師全集』では、「応化」を「化応」とする。
- (61) 底本には、傍注で「イ逕」と異本注記がある。
- (62) 智顗説、灌頂記『妙法蓮華經文句』に、「今開三顯一正意。爲決定退大聲聞令成大乘聲聞。自行既立即能化應聲聞。若得此意則達有無也」(『大正藏』第三十四卷、四六頁中)とある。

円珍『法華論四種声聞日記』をめぐって(浅野)

- (63) 湛然『法華文句記』に、「應化約垂迹全語舊聖。佛道約利他語新記者」(『大正藏』第三十四卷、一六六頁中)とある。
- (64) 『智証大師全集』には、「親」のかわりに「新」とある。ここでは意味上から「新」の字に改める。
- (65) 『智証大師全集』には、「全」のかわりに「人云」とある。
- (66) 『智証大師全集』には、「唯」のかわりに「只」とある。
- (67) 『智証大師全集』には、「唯」のかわりに「只」とある。
- (68) 『智証大師全集』には、「総合」のかわりに「惣今」とある。
- (69) 底本には、傍注で「イ其」と異本注記がある。
- (70) 引用元は未検。
- (71) 満願 富楼那のこと。
- (72) 羅云 羅睺羅のこと。
- (73) 『智証大師全集』には、「在」のかわりに「有」とある。
- (74) 未詳の文献。
- (75) 底本には、傍注で「其」「謂」とある。
- (76) 引用元は未検。
- (77) 未詳の文献。
- (78) 「法華義記を引きて曰う」とあるが、その後に引用文らしき文章は続いていない。
- (79) 底本には、傍注で「イ儲」と異本注記がある。
- (80) 『智証大師全集』には、「共」のかわりに「失」とある。
- (81) 未詳の文献。

- (82) 引用元は未検。
- (83) 未詳の文献。
- (84) 梵字の鑲。密教において智慧の識幟として金剛界大日如來の種子とする。
- (85) 『智証大師全集』には、「推」のかわりに「權」とある。
- (86) 『智証大師全集』には、「耳」のかわりに「來」とある。
- (87) 底本には、傍注で「イ授」と異本注記がある。
- (88) 寛文二年刊本には、「陀」のかわりに「陁」とある。
- (89) 三崎良周「一九七八」の五一頁を参照。
- (90) 『日本大藏經』（増補改訂版）第八十卷、八二頁上。
- (91) 同前、八六頁下。
- (92) 『大日本仏教全書』（覆刻版）第二十八冊、一三九二頁下。
- (93) 『仏書解説大辞典』第一卷、二二頁を参照。
- (94) 梵字の阿。万有の根源を象徴した字。特に密教では不生不滅であり、万物の本源であると考ええる。
- (95) 『大正蔵』第四卷、三〇頁中。

文献表

《辞典・全集類》

- 『学研新漢和大事典』（普及版）学研マーケティング「二〇一二
- 『漢訳対照梵和大辞典』（増補改訂版）鈴木学術財団「一九七九」

田珍『法華論四種声聞日記』をめぐって（浅野）

円珍『法華論四種声聞日記』をめぐって（浅野）

七

- 『広説佛教語大辞典』中村元著、東京書籍「二〇〇二」
- 『国書総目録』（補訂版）第一巻、岩波書店「一九八九」
- 『コンサイス佛教辞典』大東出版社「二〇〇九」
- 『昭和現存天台書籍綜合目録』上巻、法蔵館「一九七八」
- 『大正新脩大蔵経』大蔵出版「一九二四—一九三四」
- 『大日本仏教全書』第二十四冊、仏書刊行会「一九一三」
- 『大日本仏教全書』第二十八冊、智証大師全集第四、仏書刊行会「一九一八」
- 『大日本仏教全書』第四十一巻、天台部五、鈴木学術財団「一九七二」
- 『大日本仏教全書』第九十七巻、解題一、鈴木学術財団「一九七三」
- 『大日本仏教全書』（覆刻版）第二十四冊、天台法華宗義集、天台小部集釈、仏書刊行会「一九七八」
- 『智証大師全集』下巻、園城寺事務所「一九一八」
- 『智証大師全集』（復刊）下巻、園城寺「一九七八」
- 『天台学辞典』（新装版）国書刊行会「二〇一三」
- 『日本大蔵経』第四十三巻、宗典部、天台宗密教章疏第一、日本大蔵経編纂会「一九二〇」
- 『日本大乗経』（増補改訂版）第八十巻、天台密教章疏二、鈴木学術財団「一九七六」
- 『日本大蔵経』（増補改訂版）第九十九巻、解題三、鈴木学術財団「一九七八」
- 『佛教漢梵大辞典』平川彰編、靈友会「一九九七」
- 『仏書解説大辞典』大東出版社「一九三三—一九三五」
- 『望月仏教大辞典』第一巻、世界聖典刊行協会「一九三三」

〈著作・論文〉

大久保良順「一九六九」『天台口伝法門と密教』『印度学仏教学研究』三五、一―七頁

大竹晋「二〇一一」『新国訳大蔵経』大蔵出版

藤井教公「二〇〇一」『世親『法華論』訳注（一）』『北海道大学文学研究科紀要』一〇五、二二―一二頁

「二〇〇二」『世親『法華論』訳注（二）』『北海道大学文学研究科紀要』一〇八、一九五頁

「二〇〇三」『世親『法華論』訳注（三）』『北海道大学文学研究科紀要』一一一、一七〇頁

三崎良周「一九七八」『法華論四種声聞日記』『増補改訂日本大蔵経』第九十九卷、解題三、五〇頁下―五一頁下

〈キーワード〉『法華論四種声聞日記』、『阿若集』、円珍

Summary

On Enchin's 圓珍 *Hokke ron shi shu shōmon nikki* 法華論四種声聞日記

Manabu Asano

円珍『法華論四種声聞日記』をめぐって（浅野）

Enchin's 圓珍 (814–891) *Hokke ron shi shu shōmon nikki* 法華論四種声聞日記 in one scroll 卷 is a treatise written in catechetical form and focusing on the four types of Śrāvakayāna followers set forth in Vasubandhu's **Saddharmapuṇḍarikasūtrapadeśa* 法華論. These four types, which appear in the context of three categories of sameness 三平等, are: (1) Śrāvakayāna followers whose nature is fixed 決定声聞; (2) Śrāvakayāna followers who are arrogant[ly dismissive of Mahāyāna] 増上慢声聞; (3) Śrāvakayāna followers who have lapsed from the [bodhisattvic] resolve to attain Awakening 退菩提心声聞; (4) [Buddhas and bodhisattvas who provisionally] manifest themselves as Śrāvakayāna followers 応化声聞.

Enchin is also the author of the *Hokke ron gi* 法華論記 in ten scrolls 十卷, which is an exoteric commentary on the same text. Unlike it, however, the *Hokke ron shi shu shōmon nikki* makes frequent use of exoteric vocabulary.

According to some scholars, the *Hokke ron shi shu shōmon nikki* is wrongly attributed to Enchin. The main arguments brought in favour of this theory are the similarities it allegedly shares with the *Anyā shū* 阿若集, another text traditionally attributed to Enchin but regarded now as a compilation by other author(s).

The *Hokke ron shi shu shōmon nikki* has not received much attention in modern research and no Japanese translation has been published so far. The present paper contains the first attempt at a translation into Japanese of the entire text. I also identify and examine the

similarities in the vocabulary of the *Hokke ron shi shu shōmon nikki* and the *Anyā shū* in the hope of shedding more light on the relations between the two texts.

*Postgraduate Student,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*

円珍『法華論四種声聞日記』をめぐって（浅野）